

授業で愉しむ漢詩創作(下)「句を並べて絶句にまとめる」

愛知県立刈谷東高等学校 漢詩サイト『桐山堂』主宰 鈴木淳次

この連載もいよいよ最終回です。前号までで、平仄の整った七言句(律句)を作る段階まで進んだということで、今回はその句を並べて絶句の完成まで行きましょう。

1 主題となる句を選ぶ

絶句四句の構成をどうするか、を考える時に、まず最初の作業は「主題が最も表れているのはどの句か」を決めることです。それが作者の心情を表す抒情の句の場合もあれば、感動した風景を描いた叙景の句の場合もあります。どちらかにしなくてはいけない、ということではありません。

この主題句は必ず生徒自身で選ばせましょう。「主題」という言葉が分かりにくいようでしたら、「気合いを入れた句」「お気に入りの句」という観点でも良いのです。最も思いが深く出ている句を、自分で決めることが第一歩です。

決めた句をどこに置くか、起句や承句の前半に置いて読者を一気に自分の世界に引き込む方法もありますが、一般的に結句が順当でしょう。通常、読者は起句から順に読み始めますから、一番印象に残るのは最後の句、余韻を残すのも結句となるからです。

2 起句・承句で押韻を合わせる

次に押韻の関係で、起句と承句を決めます。

七言詩では「初句と偶数句末で押韻」が原則ですので、絶句では起句・承句・結句が対象となります。

起句・承句は詩の前半で、叙景二句、あるいは抒情二句、大体似たような内容の句を置きますので、そうした観点で二句を選び、とりあえず、起句と

承句の位置に置きます。

転句は押韻しない句ですので、末字は仄声にしなくてはいけません。これは該当する句がまだ完成していないでしょうが、先の起承の二句とは少し趣の異なる句を入れておき、末字は未定、簡単に済みそうならば仄字に直しておきます。

ここまでで、七言絶句の四句を配列できたこととなります。平仄はこれからです。大雑把に言えば、韻を踏んだ古体詩としては形になりました。ひとまずは作品ができたということで、生徒をしっかりと評価してやってください。

できれば、この段階の作品を一旦プリントアウトしておく、最終形までの推敲の過程が残り、生徒自身が創作の記録を保管できることとなります。

3 絶句四句の構成を理解する

漢詩の構成の説明には「起承転結」の語がよく使われます。「起句で詠い出し、承句でそれを受け発展し、転句で一旦話題を変え、結句で全体をまとめる」と言われます。

特に転句は「詩の命」とされ、作詩の際は「絶句は転句・結句から作れ」と昔から言われる程に重要視されてきました。しかし、推理小説の謎解きのようなあまりに劇的な展開は、技巧の目立ち過ぎる面もあり、読者に思いが伝わらないことも多くあります。四つの句が同じような色調で単調になるのを避けるため、転句で何らかの変化をつけているという程度の感覚が適当でしょう。

詩の構成をどうするかは、詩人の感性、詩の個性を表す部分です。転句まで徐々にパワーを蓄えておいて結句で一気に話題転換、主題へ跳ぶ詩も面白いし、日常の身近の景物を淡々と四句述べた詩もこれまた味わいがあるものです。

転句での話題転換の方法として代表的なものを挙げれば、

・前半に景物(叙景)、後半に心情(叙情)、またその逆の変化

- ・遠近や上下、広い狭いなどの視点や視野の変化
- ・視覚と聴覚（鳥や虫の声、水の音など）の変化
- ・時刻や天候、あるいは過去と現在など時制の変化
- ・色々な展開例（そもそも「起承転結」という構成自体も一つの例ですが）を参考にして、四句の構成への意識が高まれば、古典詩を解釈する時にも幅がで、理解が深まります。

4 詩の平仄説明

いよいよ平仄合わせになりますが、七言絶句は二通りのパターンですので、図式を先にお示ししましょう。

記号の「○」は平字、「●」は仄字、「△」はどちらでも良いことを表すのは前号と同じです。

起句	△○△●●○○○	△●○○○●●○	(反法)
承句	△●○○○●●○	△○△●●○○○	(粘法)
転句	△●○○○●●○	△○△●●○○○	(粘法)
結句	△○○△●●○○○	△●○○○●●○	(反法)

細かな説明は省きますが、起句と承句では二四六字目の平仄が逆になっていること（「反法」）、承句と転句では同じ平仄で並ぶこと（「粘法」）、そして転句と結句ではまた逆（「反法」）になっていることを確認してください。

この反法と粘法の組み合わせと、七言句の「二四不同」・「二六対」が組み合わせると、実はどこかの句の平仄が決まれば自動的に全ての句の平仄も決まることになります。そこで、起句の二文字目が平字の詩を「平起式」、仄字の詩を「仄起式」と呼びます。

この平仄図を丸暗記しようとするやと大変ですが、規則を理解すれば後はバズルのように決まるわけで、頭の柔軟な高校生ならば少し練習を重ねれば感覚的に覚えていくでしょう。

教科書所収の漢詩を用いて、それぞれの句の平仄を調べた後、「反法」か「粘法」かの判別をするという作業までも、この段階では十分でしょう。この場合、例詩はもちろん平仄に合致した作品が望ましいので、李白の「早發白帝城」「春夜洛城聞笛」、王翰の「涼州詞」などが良いでしょう。

時間が不足するようならば、あらかじめ平仄を書き添えて示すのも良いでしょう。プレゼンテーションソフトで、文字色を変えたりアニメーション効果で平仄を示せば、作業の効率化と、一見煩雑な規則説明に対しても関心を持続させることができます。

また、次のような例題を示し、クイズのような形で生徒に考えさせるのも効果的です（平仄を記さないことも可能です）。

例題 空欄に適する語を下の語群より選びなさい。

除夜作 高適（盛唐）

独●不眠○ (寒○灯● 旅館●)

故郷○今夜●思○千里● (凄○然● 客心● 何事●)

又● (明○朝● 霜鬢● 一年○)

転句の二文字目が平声ですから、これは仄起式の詩であり（起句六字目からも仄起式と判定できます）、更に、起句末字の「眠」を手がかりに韻目は「下平声一先」だと分かります。

一つの句の平仄を手がかりに残った句の平仄を決めていくという作業ですが、どこかの句の平仄が決まれば他の句の平仄も自動的に決まるといことが感覚的に分かれば良いという目標です。

この他にも、起句だけ指定し、他の句は順序をバラバラにして示し、正しく並べ替えさせるなども考えられます。

5 平仄合わせと最終確認

平仄図をプリントして渡せば、後は生徒が自分の作品で平仄を確認し、漢

和辞典を手にして合わせます。平仄合わせは、語順の入れ替え、別韻や両韻の同義語を探すなど（先号参照）と共に、ここではより大胆に、句をまたがっての語の入れ替え、時には二つの句を入れ替えるくらいの気持ちで臨みたいところですよ。

ただ、平仄にとられ過ぎて内容が当初の意図と外れてしまっただけはいけません。できるだけ生徒の思いに寄り添うのは鉄則で、指導する側も同じ立場で一緒に言葉探しをしてください。

机間巡視の間に、少しずつ最終チェックを進めます。漢詩としての外形（体裁）を整え、確認する作業になります。

「起句の押韻踏み落とし（例詩・王維「九月九日懷山東兄弟」）や「挾平格（例詩・李白「峨眉山月歌」）などの例外規定もありますが、後に「規則外れ」と誤解されることの無いように、初めての漢詩作りでは、オーソドックスな規則通りの詩に仕上げてください。

項目を列記しておきますので、できればチェックシートのような形で、先ほどの平仄表と一緒に生徒にプリントして配布すると良いでしょう。一句の段階では合っていた平仄も、語を入れ替えて検討しているうちに乱れてしまっていることもよくあります。

- ① 「二四不同」・「二六対」は各句で整っているか。
- ② 「四字目の孤平」になっていないか。
- ③ 「下三平」あるいは「下三仄」になっていないか。
- ④ 起承結で「押韻」し、転句末は仄声になっているか。
- ⑤ 「反法」「粘法」は守られているか。
- ⑥ 同じ字を別の句で使う（「同字重出」）ことはないか。
- ⑦ 国字（日本で作られた漢字）を使っていないか。

⑥と⑦は初めて見ることもかもしれませんが、この機会に指導できれば、漢字や漢詩に興味広がるでしょう。

修正の過程では一語や一字に集中して考えますので、どうしても狭い見方になりがちです。時刻や場所、天候などが前半と後半で食い違ったり、複数の句に同じような趣向の言葉が重複して使われていたり、これらは当事者では気づきにくい点ですので、指導する側で詩全体を見通す目は持っていたい

ものです。

ただ、こうした内容の矛盾は別にして、表現面である程度の物足りなさがあっても、生徒が紡ぎ出した言葉を大切に、一つでも二つでも、良い点を探して評価する姿勢は持ってください。その上で、より良い表現を求める推敲の段階へと進んでください。

最後に、紙数の関係で一首しかお示しできませんが、実際の生徒の作品と修正・推敲の例を紹介しておきます。

初夏即事

●●●●●●●●	雨霽一庭緑色新	●●●●●●●●	雨霽れて	●●●●●●●●	一庭	●●●●●●●●	緑色新たなり
●●●●●●●●	沙羅双樹落花塵	●●●●●●●●	沙羅双樹	●●●●●●●●	落花の塵		
●●●●●●●●	清風渡竹夏猶淺	●●●●●●●●	清風	●●●●●●●●	竹を渡る	●●●●●●●●	夏猶ほ浅く
●●●●●●●●	午後幽情宜憶人	●●●●●●●●	午後	●●●●●●●●	幽情	●●●●●●●●	人を憶ふに宜し

起句が四字目の孤平ですので、まず平仄の面で修正が必要です。「閑庭」「空庭」「庭前」などが候補としてあがりました。

また、起句の「緑」は、「沙羅双樹」の花の白さとの対比を本人は狙ったようですが、色を直接出したため印象が強く、花の方がぼける感じで、「苔色」「叢色」など、物を表す語で考えました。

承句の「塵」は語感が悪いので、同韻から「頻」を探しました。

転句では、前半に植物が並んだ関係で、「渡竹」がくどく感じ、風をもう少し具体的に説明する方向で言葉を探しました。

最終的には、起句は「雨霽閑庭苔色新」、転句は「清風淅淅夏猶淺」となりました。

6 まとめとして

完成して提出された作品は、再度、指導する側で確認をしてから印刷をしましょう。生徒には貴重な記録になるでしょう。

漢詩は俗世と離れた風雅な世界を描くものという感覚が強く、時事を描くことを避けるという傾向もあります。しかし、未来を担う高校生が隠者、幽棲の詩を作ることには私は違和感が強く残ります。眼前の景、そこにある自然の風物の趣への感受性も育てて欲しいと同時に、同じく、目の前の社会や人間へも関心を高めてくれることを願っています。

昨年は未曾有の災害に遭遇し、誰もが大きな悲しみを背負いました。私の主宰する漢詩サイト『桐山堂』への投稿詩でも、東日本大震災に関する詩が沢山寄せられました。詩を書く人間としてどうしても思いを言葉に託したい、表現しなくてはいけないという気持ちがあひひしと伝わってきました。

漢詩は千年以上昔の言葉と文法と規則に従う伝統文学ですが、その古い器に新しい思いを盛ることは、漢字を用いている私たち日本人にとって決して困難なことではありません。ましてや、若い高校生にとっては、導入のきっかけさえあれば、漢詩も自己表現の一つの手段に十分なり得るものだと信じています。

※漢詩サイト『桐山堂』(<http://tosando.pfu.jp>)からは、本稿で紹介した平仄チェックシートがダウンロードできます。